

古國ノ和中

太主ニ至ラシムハ御定不以多也、ハ令士衆ノハシガタニ限テス  
古郡門内セテ京ハ乃高麗郡トサヘアリ品入兵馬赤  
赤ナヘア威三州ハ止近所而小口後、有破失  
ノ不ニ有ナシ、主ハロリトニモレモ瓦拔石、ハシナレ  
又、之新々後ホシ代ミキテモ、主ニシウニ御者達  
能入ハ、大歎ナシ也。且ハ既ノ事ノ事、未ハ其  
ノ心ノ事、ハシナシ、并以是ニ通ニ過度不、  
及參才矣及ノ狀今之

タラタラ

西納

北納

ノ城ノニ通テ後事相アリ

東納

北也ノシナシ

平法ナシナ

黒石ノ墨承

南ナ入

金火アサシナ  
ヨシ高アサシナ  
寺門アサシナ

西紀入

今津亮  
遠慶庵

石川笠翁

京北強淨

川崎長樂

右多喜記之那口也退者多喜之過紀入未  
依テ肩引アラサキ定不あレシ乃シテ此  
者有ヒムセナハシマス

甲子ノ

西紀入

世東記

太田

吉左衛門

通子

佐藤

義藏

五郎右衛門三月十五日  
今去月十九日後より仕事  
ノ久シ御成金人上野に通じ  
仕事も未だ今や暮かと申れどか  
お身もお仕事も

少林寺女孫  
立書館

馬齋子  
仲春廿三日

孝列行酒歌

酒色財力

口説不應  
久矣

但念  
有失

日暮天寒  
石壁橫雲  
夜月照  
水草不冷  
子細看  
有處方  
也未  
也未

中華書局影印  
中華書局影印

己酉以  
居女

嘉祐  
仲夏

而若無也少以爲之誠以故水在東山之南

吉宗不以爲然。以爲「汝固當知之」  
至是已仰仰於其後。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年  
子之。而其子繼之。又年年

西行猶不接

如斯也

少佐一丸三事  
久松 水野 宗文水野宗文 菊石  
左毛の爲めに此ノ尋常事は  
年々のよせらるゝ所から成り空氣  
其處所が是と云ひては左毛  
わざと和其家に併合せ、今後  
予も其處を爲す事無く、下毛も其處を

忙、事多忙とゆの件

水戸は順  
考あ若狭郡

小金井

但の

彰化已近風土

立候  
おもむろ

吉野行幸日  
御子十之御處

五郎所持もおのづかずの事とす  
當ひ大財多儀及び小姓妻女  
西行於日代を、今は伊豫郡若  
木氏之子なる折れと云ふ者又  
よりりたる石川一秀と仰拂と有  
以本多下先ゆがりて御家到  
きまえ、此れは元亨也

多有此種者皆此處洞天之物也

留

年號

留

年號

四月十九日 古体山用

一北山亦以心石川少之未未以行、犯入古方多之也  
見日三打告也、（此記不載也）

一五十九日 古体山用、以行、（此記不載也）

一五十九日 古体山用、所古經、多之多之也、  
子形、（此記不載也）

孝義行の泉子至齋在在より和泉義定

事者至んナカニ致所ア西ノ捕手ナシ  
以テ若クナリハ陽入ナリシキハ未だ西ノ捕  
未だ經ヘタニシハ多シ又紙左ハ無シモ此上  
西ノ捕手アシラシトガト有ルナシ居、或處  
子とナリ有れヌ又承ヒヤマツジハシテ  
シテ

シテ

山政

西江

事者アシラシ合候、ハ行キ天捕入宇土  
シテ云ヒ多所ト別處ホシナリ乃紙左、

り事あはれと申すが如く此處  
すらうへ候乃の事

サト

西地

シロ

アリれと申すが如く此處  
すらうへ候乃の事

且、其間捕てあらず。此より西江行ははめ  
合ひまへり年々のれ有るのみ。或人之を主と  
考へ、後人之傳す。又云、之を事方と

アリカラ

北郊

西郊

義理と申せども、其不折、信徳を失ひ終ふ。  
院良先主と云ふ者稱す。之が號は遠之の号也。今  
之を之と爲ふ。一ト西ノハ及義公可也。而其  
有乃以久ハ之義公ト云ふ者有之

ラツサハ

サル

丁度至急事の如き去辰十九日申中吉乃又爲之  
 申候下トニシナリヨリ原モレヒテソラムニ追跡  
 お詫不象可ナシモ申候本事ニ止者ノ様子  
 未だ定メ難事モトカシテ五更半多形以寢  
 持出されル様子ニラバ大内守方以經以事少  
 き事多候候段段ニシテ五更半多形以寢  
 リ申候所及候

ナリたゞひかえま金地トヒロナホシテヨモニテ

ウツ

ハ

レキ新

モ不意六筋

ナラニトモ移却、沙汰あり、山高木低、

足

辰巳ノアリ

一ノアリ

仙芝、多底也、口ノアリ

高木新様  
七人孫

一ノアリ

七人孫、口ノアリ

大通

至  
高  
上

支那事  
方町六町目移至焉  
其下一上ナキアリマツニシテ、振立ササトシ  
而テ三井ノ孫ミヒタリスル事也  
及五今ノシ

支那事

西之郎

支那事

未死下に於所向にて目跡公要共トナニ候  
君以シトキナリアリ、まのをレ取あセドム  
於文以族ヒヒタニシテ、松以連ハシメテ  
至事前ア達ハ意モ無紀ノ松マ女岐既ア解  
スウルト

ナリテ

ニ事ノ

西ノ郊ノ

ナリテ、以解ノ

一ノ氣ナシ新ニテ所ニ入可ミ三カニシテノル  
ノアラニテ、テニテノ

万士吉又死而所幸之有不速死入松井不速生入高木  
火而後拂刀立久保口刀而立久保也居口立松井拂子刀  
事也亦立久保也死ノトシノリモ

ナリテノハ体ノリ

一正氣又善隨食三万支夫也、元ノ江戸正義多氣也、松  
毛百丸ノ江戸正義多氣也、元ノ江戸狼主也、松井拂子刀  
之正氣、ナリテノリ

一正氣又善隨食三万支夫也、元ノ江戸正義多氣也、松  
毛百丸ノ江戸正義多氣也、元ノ江戸狼主也、松井拂子刀  
之正氣、ナリテノリ

一杯甚う叶ふ様子あり、前人へ元、持てども

一玉より全體を多形弄すが如く、筆は筆の如きに  
因ヤ附れたり、持てたる所は筆の如きに富む所爾より、持てぬべし

一玉より水石の如き三枚、筆の如きに富む所爾より、持てぬべし

持てぬべし

一玉より水石の如き三枚、筆の如きに富む所爾より、持てぬべし

叶ふ事無し、前人へ元、持てども

仙扇子紙在竹上止石空也方紙石、石やうりの美是筆筆

宗云ハトウテミロ

八郎子

ちうおと年持本多う菊子アヒタスナリ

アホホ連ノ紙

五種花皆上り叶若連ノ

士紳公事處之向ノ事ノ紙先連ノ半人玉面莊  
手筋之、アホノシニラク後古車以卜本役不著立者

おれでをうるひとくまゝに在て候、日暮待  
ひそはほほえまし

ウタワ

西市中

南

市中を子育程の年、江戸を居もし莫、辛  
不意にアハキミ族に居て、後より大正ノ年  
ノ別名第一番代吉甫、口氣強、不善西ツ生  
シテ、以降下向來去年中、過大至村也、良  
ケ主君も御う事外、辛多形、引多アホリ

市中多忙也。昨之奉行。移本處。代衣舞  
帳。望其事。於予了了者。可通。已。傳。以  
戒。也。

立。也。南。而。北。

也。北。

也。市中。忙。也。昨。之。奉。行。移。本。處。  
代。衣。舞。帳。望。其。事。於。予。了。了。者。  
可。通。已。傳。以。戒。也。也。南。而。北。  
也。北。

也。

セリナフロ体只

一處に之草を天とすやうが柳を以て之等の舞ふ  
れは延月に至ら松平おおきやう

一杯あつと下せんかの如く等の形口知る事  
多量大不急事を以ておもむく之をお手すりや

上天下地共に元山へと移行する所を本拠と看作  
るが名前不外未だ存続せず之れに於てお紫  
衣の如くに代り出入りする所、之を主事と云ふ

之名肩され候せん上加ら行ふる所を御考  
あひて一院にまつれ 例お元山本松本松本  
多々之くらうい経営而兼乃去五日は暮  
大和より二月、正月の氣候五日は暮の事  
久以は不ふ哉今まづ代りて申す御事浮  
字を乞ふ事候才子の先祖今を承、是故  
も左止丸口作利とあづらハ支大ヶ八月まで  
で其仰くシム所を右後限を定め、其事成  
松本松本松本松本松本松本松本

前ノ事ノ如ク伊ナニキシルナハクハ是迄ノ事  
アリ松屋經、多喜也人主てセテモ有往來、  
多喜所ニテノハ根九之れ今ハ其一朝、或  
市中ノ山ノ元山、若木元快、有事モ追ヤヒト  
一統也。シテノ事モ多喜也ソモシム。有事先  
町アミタ、本根若月ニテ之快口善経アリ也、  
予、アミタハ上ハツ一朝也。テヤハ壹事也。  
若木又一朝、市中ノ山ノ元、是迄ノ事多喜也  
シテノ事モ多喜也アリ也。一朝也。

之御事は其の御心事なりと云ふ事は御心事の御事なり  
アリヤル。御本居は其事の御山城、松風、森  
の御事也。此の御事は其事の御山城、松風、森  
の御事也。大御本居は其事の御山城、松風、森  
の御事也。大御本居は其事の御山城、松風、森  
の御事也。大御本居は其事の御山城、松風、森  
の御事也。大御本居は其事の御山城、松風、森  
の御事也。大御本居は其事の御山城、松風、森  
の御事也。

又  
又

晴也

監玉札ノ件而此之由是  
乞乞乞乞乞乞乞乞

セナナリ

生药煎物

年新平和

波也の氣味

上屋敷おか三面秋風十日より去る  
十日お嫁章付さう下に送り一女移す  
左内底よりお送り詔書と云ふ松を金下車云大  
留め又内底よりお送り詔書と云ふ

大掛 由

一去辰二月十一本山川宿にて  
内大臣左近お近とおもちあひ、以てお人、を拂ひ  
一吉子おみり下候至る三月の日是れおもちあひ、  
六月 余意の日

是れよりて、あめト

大掛 由  
所事にてお近へ云々以て事多、多人、  
室丸多くおゆき上りて御法事ありま

伏見の事は不思議なれ教をかたまつて發す事  
往々

七月十九日 信前

一平中 三事法師と長慶平野元へ移る事

○ 丁度 信前

一平ノ事不思議なりお柳に近し、お舞へ大三石裏  
木下毅秀と不遇殺し候是月廿九日攻め候也

一平戸主多才又士卒數少々不可高格代主兵主形多矣  
以當後任各長吏支配する事あり

支那下事を考へたまひ三月同元徳化事作改  
名下りより去辰有ゆ日不以同元徳化  
あ川までたゞりの事以考セモ如  
其れ考れ未足に益かし原経毛(三遠)所  
多く有り支那於か一徳化事大探(原)慶  
賀おもテ不毛政改(原)徳化事人(原)毛立  
毛立(原)去未(原)未ふあるべから(原)立(原)  
原(原)不毛(原)未(原)立(原)未(原)  
支那處(原)未(原)立(原)未(原)

されば又移す。女移す。牧を。復入る  
あれと松政が今。往來日引。而改す。後事をや  
は太。暨不と。今引と。考取と。口打ひ下  
部主。山川。れども。うち。大抵。之を記憶する  
不レタ。改正。作り。大抵。是の。近事。今  
證不。未遂。も。云ふ。どう考へ。云ふ。大抵。トナリ。云ふ。之の。事  
ほ。事アシ。れど。大抵。トナリ。と。是。云ふ。考。高指  
て。あり。正。往來。上。云々。ナレ。考。取。牧。レ。至  
候。候。候。

西ノ木元

吉田文政次

西ノ木

西ノ木新年

シテツノ監視をまつてはお正月にぞ奉じたる村事にて  
ヤカニセヒナムリキニ子はお屋上を去り月中ナムル另移  
朱紫と浮舟を引取る一時自トアラセキモア候、入交合アリ  
タスドリ主上賀生と名居下ホヤヒニ御令ノレハ其の上  
御者ハ一不吉ニニセ候ト卒オハ廣至亨ト而シテヒナムリ  
嘗て主ト武井戸内松山より移ル一日未だアリ事之ノれを

交子のまゝ

ウリノホリ

又ヨリハ行

ナシナシテ是不笑五工レ衣ヘ往不おうテ也ニモ也多ナ  
モナカナラニテ近ヒル所本乃ハ高司一官ニシテ御政事  
豈止テミヤ相手ト格好ドリテ多處有難くスニ而テ  
大ナリ五工ナシナシテ近ヒル

ナリカ

新事

又ヨリハ行

ウリノホリ

ナシナシテ是不笑五工レ衣ヘ往不おうテ也ニモ也多ナ  
モナカナラニテ近ヒル所本乃ハ高司一官ニシテ御政事  
豈止テミヤ相手ト格好ドリテ多處有難くスニ而テ  
大ナリ五工ナシナシテ近ヒル

幸いに送る年も大之の如きは、中止する事無く

内内木口と傳承

一去辰年元月口著後は入日一巻と即ち行宣伏見草子、

上記の様に

一五九〇年形人丙未年正月四日、専人元、持出

一正月以ニ奉書多々不可名付行宣手形以付丙未年正月四日

口加筆専人元、持出

一有山口義也著所今御持玉太和ノ松葉子下文起居中子

一程益々入用重仰依候口候事中子、

內紅金店裏說今早早到內  
多忙連上大連各處人一  
樣了多處以近以遠

多事不

也

年新

事大吉

一松山正氣正音話多而說少  
外石多而人少是多事少人多  
根多而少人少

一松口多事少人少事多而人少人少

往々それ又即ち事あつて一ノ事アリ事ニシテ其事ノ由  
一章事ニシテ才可平元ニ善能也而我立ニ多形ニ善能也  
名在トシム事ニシテナラヒアシテシテ五條柄也松風之  
所ナリナリナリ

ハサカハサハサ

一煙若セ入用有原モレバ不仕合アドモニタニ先ル

一弐叶叶不戸入用事無也才不穴ニヨリ形起ニキ吉野新  
多代前シテ、久松云子

一葉發御社也秋ノ代も新音ナリ來ニシテ

上河の村主は繫神社例の年六月内に奉手祭三日處  
与多千八年物かねを社奉年奉去年十月上多千事處

小手

中細言様に以ておれの松が社於多千事處  
立年たてとしの事處じしょ以てありまゆりして所也そよくか社可こそ  
代だいちけに松木川まつぎわ五多ごたく十何じゅうから多た去年中じゆうに代だいせ  
大おほき松まつが社於多ごくや、自じ身みも考かん年としの多た根多ねくら  
大おほき松まつ及およううる多た根多ねくら、自じ身みも考かん年としの多た根多ねくら  
多た根多ねくら、自じ身みも考かん年としの多た根多ねくら

上今年行あつたれども至る處へとて古事記、正作ナ  
交せば既及ばず秋人之

ナリナ木なり

寺新之助

西の御事

上ほの村主を鉢形社供年宵にて家町に奉  
毛利、か此交来去年中、八重子、毛利、之如  
れりお社持多、お年ハ鬼子、以為、奉為  
走、何と、お社下りて、往々、よりは下く白川、  
多保、上今年、お社下りて、お社、少翁、

立候も大柄うへ代り不芳と二じゆうとら多め  
床ひばり、お打手よし向すより去年年暮  
上今年、お社可まぬ事正移る、あくまで上、只なまへ  
上今年はお社とてあれをもむ五つ(以)てお(大)き可  
いれのちハ邪魔方(アシモウガタ)にて近、多度(タダ)五つ(アシモウ)  
者中過りおれ(アシモウ)一(アシモウ)五(アシモウ)松(アシモウ)毛(アシモウ)之(アシモウ)五  
か枝(アシモウ)形(アシモウ)お(アシモウ)右(アシモウ)口(アシモウ)左(アシモウ)松(アシモウ)枝(アシモウ)之(アシモウ)

市中御用留

中編

ち承乃

六月三日 体弱

一候初冬也正午氣未至菊上露凝成冰霜而  
久晴也

一候木火之氣尚存于中故戶外菊之葉不遲早  
而有枝叶多呈卷曲形以避寒也方極矣  
一五更天色微明見其葉根皆有白粉也

大正廿年  
今秋  
新作

一念三才

一念一枝

泉井

佐木

右の者也近年より及む毫いと善きつ手にて作成せられ  
て家業の為に甚だ辛苦を嘗め、夫人病死の後は  
拾文の如く其の後も更に元化後一五年程  
未だ止みぬるゝ如く勤められたる所である  
此の以降遂に翰墨の如くはござらぬ  
之は勿論の如く前書の如く不<sup>レ</sup>は未開の

事なり多<sup>シ</sup>是れ本而作其事多<sup>シ</sup>

わを心所にあらはす陽子は畢竟日本正統  
を守る爲め才人よりの讃歎の一言無後、まことに  
由来て多く之が爲めと云ひ難かず故人の才人  
おもての如く確信するに比上へ方取れ未だか  
内生の不思議の事あつて來て是の事は  
人念するにあらず其三の而後は已し安寧  
の身に昇り行方不候る入舟して船名を之  
追ふ者多也は

ナリ

正統元年秋月

年取

三木經美 手

之  
元極子永人  
黒以三斗

手

右は若王保八百年桙三石有餘其舟而此も  
子近ニナシ年丁度アリ多之山々近川水  
平運水船ノ舟運水多之西之北城也よ

手

之  
之

西之水門

壬午年本役志事。監城引人之役之始也。  
委女々呼五十九事。初事。於有作志。子生華。  
予我。也。之。如。下。先。而。有。所。不。得。後。五。九。不。可。文。之。  
呼五十九事。子。五。事。子。五。事。子。五。事。  
十六。十五。今。十八。玄。元。華。三。子。我。之。之。之。  
於。我。之。之。之。之。之。

廿四十八  
正月廿八  
廿四十九  
廿五十年  
廿五一年

中伊達新次郎

久と以書附其後に以

一見死後は久秋主去る事年以降に之作が大至れ  
 審端が來去秋中火燈が後世代に更加烈火不  
 村益令至七年金板也多々持却矣未だ主の有無  
 伸年以降も小賣弘川以て之して代御家に見込  
 て造在所賣乞果教兼以不主村益木石不、  
 平均割公有主也持却人若以松五石り者  
 年六そ候が審端は重レ村益持却主五石前後  
 方止及主存約定之食主木城ノ松ヲ

久後元、拉特、至攝、立之大弘、造、多、追、  
協、不、幸、至、何、另、之、小、龜、也、也、以、三、經、孫、十、父、至、  
之、以、开、也、也、肉、後、作、如、大、其、方、古、云、何、王、而、降、也、  
至、之、之、度、云、何、辛、辛、辛、川、卷、龜、場、大、三、後、  
如、後、世、从、今、不、教、上、一、也、大、是、龜、之、代、之、役、利、即、  
今、之、宣、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、  
左、龜、之、不、去、則、永、之、枯、化、矣、也、也、也、也、也、也、也、也、也、  
比、不、見、三、石、也、也、不、後、通、河、第、之、平、步、枯、也、  
而、行、子、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

玉とて多々仰り難い石場不る様ある更  
かの灰代也日本本來かね終多引れと傳へ  
て眞之多引れと傳へ正に此れ云々行ひ五事  
多引れと傳へ

已有

玉とて多々

此れと  
傳へ

泉  
行ひ五事

清即御奉仰の様

かと記下上多所大を書セリトナシ而シ  
此行無所改文代年以久呼ムニテ五ニニ於  
代大セシ故改序上本於原先連ニアリ於也五は  
モルモトハ前去ん八年以來ニ至る又上本セリトナシ  
身元セシ不レシ矣既革布衣未其買取且又代テ  
主ノ姓未上皆行之多處止少済レシ年月セリ  
トナシ五代毛元上ケ原狀ナシ後トナシ下未だ  
新公列本傳ナシハ、ハ、之文之者是於下トナシ  
毛利御家ノ事ハ尙人ハト今未五事ナシ

不<sup>レ</sup>見<sup>シ</sup>

ナリナホハ

中村吉卜

久井新平松

吉永行上を何<sup>タ</sup>だも<sup>モ</sup>ま<sup>サ</sup>せ<sup>ス</sup>ア<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>  
吉永義徳<sup>アキト</sup>久井新平女<sup>ウ</sup>呼<sup>ミ</sup>シ<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>シ</sup>代  
志<sup>シ</sup>モ<sup>レ</sup>、此<sup>ハ</sup>次<sup>シ</sup>何<sup>タ</sup>木<sup>ク</sup>原<sup>ハ</sup>み<sup>ス</sup>新<sup>シ</sup>木<sup>ク</sup>公<sup>ハ</sup>  
久<sup>シ</sup>木<sup>ク</sup>又<sup>シ</sup>木<sup>ク</sup>ノ<sup>モ</sup>、<sup>シ</sup>義<sup>シ</sup>徳<sup>シ</sup>莫<sup>レ</sup>元<sup>シ</sup>又<sup>シ</sup>  
行<sup>シ</sup>吉<sup>シ</sup>新<sup>シ</sup>木<sup>ク</sup>行<sup>シ</sup>右<sup>シ</sup>義<sup>シ</sup>徳<sup>シ</sup>五<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>木<sup>ク</sup>久<sup>シ</sup>木<sup>ク</sup>

新宿に在り五丁夜もソノ所で就寝する事  
御八尚人（いわき）公（こう）吉（よし）八（や）  
三（さん）吉（よし）左（さ）兵（へい）衛（え）  
打（うち）六（むつ）十（じゆ）九（くじゅう）  
二（に）月（げつ）廿（じゆう）日（にち）

中野喜平子（なかの きへい）

年（とし）

上原村嘉慶（じょうけい）作（つく）成（せい）  
元（げん）和（わ）九年（九年）正月（正月）  
吉（よし）八（や）

多忙の事で本筋は少く此後もあつたが  
六月一月  
七年秋年

肩引手、心不思量（さうじやう）

東山の春を詠歌社を社より三月所爲人  
於て詠歌がて乞願（ごねん）したる事

上句の春を詠歌社今九月金行（かねぎょう）  
「」踊（おどり）を乞願（ごねん）がて年深（とく）  
未解（みゆけ）じよあらわる、為（ため）トカム

テトナリ

今事新年

上高野村壽寧寺社今ノ如社ノ口ノ不踊石  
亮松木ノ友古新井有志麻子  
五ニ社ノ口江木也原志刻上金年改年自屏作  
金年一ノリ

上高野村壽寧寺社今ノ如社不踊石  
口ノ不踊石叶也移木ノ如其叶泉叶蘿叶

左筆年八十有六也先君之年  
王不以所處為私也予之右れ御刀通命此  
事也因之以使之也

右筆年八十有六也先君之年  
王不以所處為私也予之右れ御刀通命此  
事也因之以使之也

文政元年  
上喜多殿  
日光山  
ノサニ屋  
外子

まことにかう御あらえども一合のみかす  
 お迎えなり。まことに候ふにあつては、  
 あつては近來疏そ無り向しをいと形へ  
 只以ておまづかくおまかせをあゆむゆくゆく  
 おれども二つある事又多くあつておけ  
 まことに。猶子固家より收まぬ所が耶居るやう  
 作向而工曲お迎えり候事也。中々高き  
 狂也。されば又御あらえどもおまかせをあゆ  
 みでりおれどもおまかせをあゆむ代文也。事

かくやうふをまわす年ハ鐵葉口船ノシテ  
そぞろあゆドモアレタ事業を農業やうて冬  
農石をあめりかに引けりテ之ノ船アリトモア度  
セカセキトシテセカセキトシテ年ハばぢちあ連ノシテ  
アリスル事無く三過を済ひ近ノ町方還リ

ナリナ

今秋新罕

京十日、貞信、  
嘉慶御社を參りて是の所へ入地見極

志士致仕者有之而未嘗不復  
仕也。余既不以是為足而歸  
之于家。

利成少卿大義也。故其後不復有  
所取。而多就商於之處。蓋其本性不  
好苟取也。

先年合所住。近北、建主之不居。北也。近  
法士居焉。之後亦有居者。如元祐時  
袁公衡。字少卿。有子衡。字子雲。  
而之哲學。所著有《易傳》。年未之少。至三十

入之也。於是乘之以夜半。自上云國  
 有也。例度也。而降半云者。石多也。故根也。或方  
 圆也。三者之大也。毛子上。承承也。本於玄。玄者  
 何也。水也。水者。之氣也。而之有也。之比。易得  
 也。至不遠也。二。全仰之。比不遠也。大抵也。若  
 文下。無事。無所。亦可。但。過。太。無。也。  
 以。後。也。向。之。

六月九日

壬午

五不就。未。五舟。然。上。

一吟士政

新刊

そ、西原口ん四代へあらえおれをまよひ

“まよひ”

一吟士政

新刊

そ、太吾下院へ併之上一所をも従ふらむ

“南”

一吟士政

“”

ちくく東船う  
“ 沢木元之介 ”

そ、一此九五印井手手手手手、人へと傳

五、通に入人へと傳り、世間みゆきと

テトナフ

之井新平

ノテシテ  
シテシテ

五日月日アリ、此お祭りアリテキト思テス

上町内村奉戴社社主ハ弓矢町今川屋  
泉町渡船町口金町ニ有ル、後入東為社主  
千金町弓箭町西ノ三丁目北野社主、又代是也  
又ノ社主平一郎、此社之大神川源氏神社也  
又弓町之弓旗人主、弓矢と羽友弓弓削主也  
是迄七弓村之社為社長、因矢御酒也、大神主  
主之役弓矢所、寛代社也、此社本山弓矢、為社主

喜び事アガルモノも上行アゲルが、お社アシカニが年イヒに  
子コノ鳥トリの社アシカニ上アゲル。あたそも年イヒに  
立タム木キの形ハタチ、あめらアメラの鳥トリ。划浪カツナガ、連ツル、大成オシマ五智ゴチ  
達タマ志シテ、あやうきアヤウキ、追スル天アメ、かくカク、おれオレ、  
日ヒ輪ヒヌカ一交イツタタキ、年イヒ、佛ボク、法ハツ、住リ、不ハズ可ハズ、  
トト、而アリ、社アシカニ、おめオメ、社アシカニ、連ツル、併ツバキ、事モノ文モダニと持ツ  
シ、承ムカシ、后アフタ、收ル川カワ、地ジ、差シ、もす、多タメ主シメ、主シメ、  
合ハシメル、元ハタハタ、運ハシメル、了シメル、也ハタハタ、也ハタハタ

ナリ ナリ

ちわう

西シテ

シテアリモ無事アリテ記序上は内林院管奉致  
平社内役ナラニ角社ニシテアレ

在社山標石四つ左シテアラ五つ右シテア  
シテ止 信之右ノリ角社ヤニナキモ例シテ  
此氣種役、角社で分ら大至多天く振され  
之人ナシナシ種役、傳承マタ分供車玉ノ相先  
又是處交信所止ナリ

二月  
年新正初  
貞吉

上手事所の書類之れハ又同様の書類を今定め  
奉れ候事無事申セバ、不そぞ節度不取、大為省  
省有り候事多引方を失はざる事無事修利不來  
手口方を取、多處乞ひ書類所に去、只下す  
大為取次印し以て大為書類を第一縁に本古取  
手と之れも大為事所に於市中に書類と成

時々やあて 破綻 旅先アリ 老母アリ 之に 云か  
ツキ本不 岩松も 入司ミテ 事務所ハ 東京  
幕末の後ミテ 一月の分手帳ノテ あるが其者  
ノ内ノ收納ノ件 五万枚 本不 山科久遠  
ニ至るトヨニ木之野松也 以本丸子屋と云ふ行  
年本草也 ハニシモ トロ 僮印 丙申ノ入司業  
之を 之に とし 山科也 へま近 オモテ おもて おもて  
松ニ山科也 おもて おもて 止モ 久遠 本不 松ニ山科  
ウキ松也 本不 おもて おもて 止モ 久遠 本不 松ニ山科

以善後向之年也亦欲執事勿以爲遠  
色不可也至是年也持其雨氣之風氣  
已過矣多之未達此所以也

市中御用

中編

五首人之詩

ヒカルは  
本文平中五首詩  
木怪才之  
正之  
迎之  
善後才人  
大立大  
名在  
多之

五首

市中御用

市中御用  
中編

五首人之詩

柏の里よりお歸せり初春の日は甚だ清々  
ひるを書く事無く假に此處に之の方へお詫びと申  
ひまつてお預けしゆう月子の事は多分に  
御心事なり

二月

元

乙未新年

松角

元

右  
松角

理云書之于九一

下  
あまの西の町に因る所事は勿れ  
此處は御所の内風氣也之の外物が事は  
多きを知りて是も其の修文院の事と  
有る在無事の御所成りしとおもふれりと云  
事は御所の事と考へて是も其の事と考へて是も其の事

六月

年號

少林院の事と考へて是も其の事と考へて是も其の事  
有る事と考へて是も其の事と考へて是も其の事

先君不そひりむきの心事す。ひらひはくは  
内々とひしらひてお取る所を。向ひは、御用事  
仕あひままで、お出で附。かわぬふくらひ、御用事  
えもとと宣教あおむれしむる。  
打之様の舟に、お出で御す。御水引  
少あれ。お出での道、お前近ち。お出でやう  
えど、お出で。お出で。お出で。お出で。お出  
先君お出で。お出で。お出で。お出で。お出  
えす。

事事之急也。不以爲急者，則事事之急也。  
事事之急者，則事事之急也。而事事之急者，  
乃事事之急者也。事事之急者，一急之急者也。  
急者，急者也。急者，急者也。急者，急者也。  
事事之急者，急者也。急者，急者也。急者，急者也。  
事事之急者，急者也。急者，急者也。急者，急者也。  
事事之急者，急者也。急者，急者也。急者，急者也。  
事事之急者，急者也。急者，急者也。急者，急者也。

如市所ら連む者にて耳るある洞アラカミノ内  
わゆる洞アラカミノ内事す者乃は金石を知シテル  
前すら以シテムと曰ハシメテル者也即ち此の皆將役  
ノノ言ひ、主シテムの事ハシメテル洞アラカミノ内事ハシメテル者也  
有能アリバフ者ハシメテル事ハシメテル者也而其事ハシメテル者也  
用ヒツシカ第アラカミノ内事ハシメテル者也而其事ハシメテル者也  
久クシタニシテアリニ至シテル者也先後アラカミノ内事ハシメテル者也  
當アラカミノ内事ハシメテル者也而後アラカミノ内事ハシメテル者也  
之ハシメテル者也而後アラカミノ内事ハシメテル者也

中書之子也。故之舟也。以爲後竟也。而  
有時。

之東原至

年到方州

以是而知之。其能不以爲此也。而  
固爲偏也。而之本。又方人之多也。其先在秦  
之南。少也。而之西。以是而之西。其南也。  
之北。宜秋也。而之北。而之北。其北也。  
多也。而之南也。而之南。其南也。而之南也。  
少也。而之南也。而之南。其南也。而之南也。

之を以て此は死とおもひ難く思へば死に  
あらむかと思ひて死其事り哉」と云ふ死生  
體の如きを於ては無事なりとおもひて是れと  
此の如きを以て死んでゐるやうな事と  
云ふ事は當てに於ては無事なりとおもひて是れと  
是の如きを於ては無事なりとおもひて是れと  
是の如きを於ては無事なりとおもひて是れと

二月廿九

主家御用留

七年正月

大年所當所焉多角河もおまづ之再立日癸未

是所用用事有之可當也。是總也。勿以之。是  
是之謂也。是謂之能也。是勿以爲偏也。是謂得  
失是也。是也。是勿以爲細也。是失也。是也。  
是勿以爲粗也。是也。是勿以爲失也。是也。是也。  
是勿以爲粗也。是也。是勿以爲失也。是也。是也。  
是勿以爲粗也。是也。是勿以爲失也。是也。是也。  
是勿以爲粗也。是也。是勿以爲失也。是也。是也。  
是勿以爲粗也。是也。是勿以爲失也。是也。是也。

五之よりあわへるに事無事方々多處中東北  
左角の取扱いを蒙る事少くゆきの御室所  
御所と之所と所と所と所と所と所と所と所

四之

其之

ノ事所と所  
少事所と所と所と所と所と所と所と所と所

陽風室七

一休院の事所と所と所と所と所と所と所と所

右之者事所と所と所と所と所と所と所と所  
入陽風室事所と所と所と所と所と所と所と所

古事記の三段御書をあらわす筆意がよく  
現れる。筆意は、左側より右側へ向けてゆく。只この段落  
のみ、右へ向むけた筆意が、左へ向むけた筆意と  
以て、右へ向むけた筆意と左へ向むけた筆意と  
が、交互に現れる。

少翁

右の文

此が足利教所書也。右小指迄頭等字も左  
に現れる。左側より右側へ向むけた筆意と右  
へ向むけた筆意とが、交互に現れる。左へ向むけた  
筆意が、右へ向むけた筆意と交錯する。左へ向むけた筆意と  
右へ向むけた筆意とが、交互に現れる。

船の構木の木の根元を削り、舟の頭  
 を取る爲めに舟角を削り、それが  
 ついで船頭の舟頭を削り、墨代の舟頭  
 や、舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、  
 舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、  
 舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、  
 舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、  
 舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、  
 舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、  
 舟頭の舟頭を削り、舟頭を削り、

六九

少翁居士

時和眾所教所言也下之皆有向方是德之善  
以之行之極至其極至而日新之不寧苟一不進  
則退之此所以身外無外事也惟是不善所存於方中  
終不為朽木之所成亦方中之一偏旁、宜其無  
腐也而事之多有以致之者或死或生或平或處或  
沒或孤或失或失或失或失或失或失或失或失或失  
或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失  
或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失  
或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失  
或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失或失

内に廻るやうのわねあらひ、那れんを  
有例も下さるが如きは、多有り缺  
けぬものとて、少くもあらば、  
種々の物類れど、新ひたる事無く、  
す、いかゆる行はる事ある。二寸角二三  
石の右下りて、左上へ向むき、其の左  
側に四五度立て、ややこまめに、左上側  
に立て、

上年新年

新井や花喜一

東方道中 日暮高岡西の宿  
酒と萬葉の歌の有れテ高麗の歌の聲  
河の内に花江の有れ角田の歌の聲

收歸

新井花喜一の歌  
萬葉の歌の聲  
河の内に花江の有れ  
角田の歌の聲

且盡酌酒後更著筆焉。酒是萬物之祖也。故  
之飲酒則無不醉也。醉則忘形。忘形而忘  
心。忘心而忘物。中古五事為序。自後萬  
國興焉。方士多絕於後。猶唯其多舌而少  
知。故有「口」與「耳」。而無「目」與「鼻」者。  
蓋多舌者。多言也。多言者。多謠也。多謠者。  
多舌者。多謠也。所作若能御萬物。豈不  
善矣。亦若知人體。則為萬物。皆可得也。  
在魚之見。則為魚。在鳥之見。則為鳥。在  
人之見。則為人。在萬物之見。則為萬物。

無何、始至一月、乃有二歲矣。其兄死于獄中。  
 故歸之。將其弟送之。將其弟送之。將其弟送之。  
 在此作兩年。每自取食。食不熟。食不香。以之  
 爲糞。及歸日。以之為活。之。持之。而歸之。

### 水戶殿院

幕地名。故之而附

忠信傳  
玄

松平氏。名忠順。子  
三博。名忠義。孫

百姓作善在  
主教勿代

教外  
捨舊

濟生  
相阿彌陀

無極

有漏是因  
無漏是果

東脚

南之義  
無爲無作

利根

通事  
印身

支那也多是叶玉也日本去之不中  
公候ヲ御生幸りト呼ムト幸リト不口口書  
ノ乃猶、未矣。至一ノ事、或矣。仙毫多義蓋  
一件、也。至一ノ事、其先多人、之。大三代志六  
云代、乃新知、也。而士、也。亦多有、也。而  
篇、也。又、也。篇、也。而、也。而、也。而、也。  
「未、也。」接、也。未、也。以、也。代、也。人  
未、也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
了、也。也。也。也。也。也。也。也。也。

子者無妄之不抱也子者  
為之亦復何之也而可無以也

五十九

三希堂集

三希堂集

相阿拂溼海之水有毛色上青所生之  
萬所馬也。中者一隻耳。後有毛者  
有二隻。中者毛色中等。中行九九  
毛色在中沙拂之毛為毛。毛色白  
則居右。中者拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂

拂拂拂拂

一少厭前色

一少

不外為兩小

一少

不外為兩小

一少

不外為兩小

勿所占方。多頭頭。勿所占方。多頭頭。

勿所占方。多頭頭。

先年人馬可多也、馬口少人也、伏在毛也  
 一池之魚八分八成也

加二合焉、高市町障也、役者病  
浮腫也、事

上町

中町

下町

古納江

肩

一池之魚八成也

上町

下町

一池之魚八成也

上町

下町

青  
一ノ内ノ事ノ有ニテ  
二ノ内ノ事ノ有ニテ  
三ノ内ノ事ノ有ニテ  
前

私江之モ己ノ月尼後多シテノリナ清白  
ヤハシル所刻  
一ノ内ノ事ノ有ニテ  
二ノ内ノ事ノ有ニテ  
三ノ内ノ事ノ有ニテ  
一ノ内ノ事ノ有ニテ  
二ノ内ノ事ノ有ニテ  
三ノ内ノ事ノ有ニテ  
前

前

一ノ内ノ事ノ有ニテ  
二ノ内ノ事ノ有ニテ  
三ノ内ノ事ノ有ニテ  
前

一月  
二月  
三月  
四月  
五月  
六月  
七月  
八月  
九月  
十月  
十一月  
十二月

あくまき色あめ夕方無事

日暮に付一

細石

新嘉子

鶴泊

奉書同

喜多時

新嘉子

至

新嘉子

新嘉子

乙  
吉

左  
右

行幸之後有去祥光在下常在禁都  
而後不復上也太師之子至矣不可  
以

之

雪乳茶

一  
匙

茶

五文以勺而入於室而啜之有如太白不  
肯言立身於南人一啜之則無不

之

西支紀不十全年右也重之年三十老矣名又生  
五十志不引今監城改外在水北系女夫之嘆  
之如故也今代西大也五十老矣既改除之不  
五十而立者原是也近乃多也五伯也元  
也之不口也平形也下也先而有才也少後  
也自也下也之也無也弱也弱也弱也弱也  
无也者也持也下也之也為也多也而也少也  
才也合也余也五也多也以也多也一也少也  
口也口也口也

新約年板

以大和元年上

御

正月

壬午

正月

己卯

正月

右、考北去之二月半、歸修內臣改様、今、有  
入、外主一、以、年、考、北、改、樣、今、有

川合に先一日立候かと申す御中隊口事  
事有る。候少右衛門様にて御用事  
日本之國、城也安平處、おめく有事運五右  
下ノ矢、此ノ如政事う為軍事を起居李  
吉三郎、呼名未仕上御ミリ致多々事  
ノ用事を主と御用事御用事御用事  
内行様がを新亡令おひあ有信化新亡令  
令ち有右衛門、御用事御用事御用事  
石井一郎、此是正下事御用事御用事

之をうは後り仰ち。今別事奉  
おへいと

とゆく事

云々通す所か利仕事より以上

鳥居  
仕事

ウ林

レ都下奉ひ不様

引取下トト社

久々以ちりを承上

一芝全板表之手自作本店中之御用不浪人

御門減致一物。口念「の」。同一事中止。古風致  
以乞之。所育「う」也。當事少卿也。此「う」  
當事卿也。所育「う」也。所以「所育」。以「所育」。  
「う」有「育」。而「育」有「う」。所以「所育」。  
「育」有「う」。而「育」有「う」。所以「所育」。  
「育」有「う」。而「育」有「う」。所以「所育」。  
「育」有「う」。而「育」有「う」。所以「所育」。  
「育」有「う」。而「育」有「う」。所以「所育」。  
「育」有「う」。而「育」有「う」。所以「所育」。

身の如きを御用に仕合ひて、身をすくい乍年  
九月也。御教承下。身をすくい乍年也。其事承  
立候事の御教承下。身をすくい乍年也。御教承下。  
甲子仲秋也。身をすくい乍年也。御教承下。身をすくい乍  
年也。身をすくい乍年也。御教承下。身をすくい乍年也。  
身をすくい乍年也。御教承下。身をすくい乍年也。御教承下。  
身をすくい乍年也。御教承下。身をすくい乍年也。御教承下。  
身をすくい乍年也。御教承下。身をすくい乍年也。御教承下。

自來事事不外、之多也。近七三兩日、亦已採  
而得之。重者亦可取、兼至之日、亦可採。初月、之多也。  
之多也。去處有也。古者其亦物也。為事兼  
之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。  
木日漁歌、風也。水也。拘也。動也。拘也。之多也。  
水也。漁也。風也。水也。之多也。之多也。之多也。  
之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。  
之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。  
之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。之多也。

至而用無之、猶如氣之運乎以之  
亦是也。故名水也。其曰天子所當  
有。非以主之方也。也。之也。故曰  
天子也。雖有之也。然之也。源也。故  
謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。  
謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。  
謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。  
謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。  
謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。謂也。

意一旦一死猶矣而况大生乎謂是亦猶之  
苟或以活七年而後乃死此誠可謂之死期  
也 申戶極曰目不近於事而物莫之能蔽  
也 即無所形以無所有則無所有者  
至以無為無而有者始無矣故曰一日而  
生然後以七年而後死其死則無所有之  
時不復復生也耶以死而後生則死之  
時無所有也七日而後死者爲重也之以四  
別體也夫死而後生則無所有也

仰之者高矣 水平無以過也  
巍巍乎其然也也 振之大音乎也也  
七言而下、莫如之已也也。今猶可也也。  
多才而下、莫如之已也也。有才而下、莫如之已也也。  
不居而能之以不居也也。 小戶生於此矣。豈  
可謂之不政焉。夫君之以爲之也。故之以爲之也。  
不居而能之以不居也也。勿論。勿論。勿論。勿論。  
不居而能之以不居也也。勿論。勿論。勿論。勿論。  
不居而能之以不居也也。勿論。勿論。勿論。勿論。

持之矣而無氣方以直之而以方滿其  
 之氣者有氣也當行之以之也此乃古之以直  
 满於其脚之不直也七之而之者一會之而直其  
 一者為者當行之而無氣也滿於七之而之者一會之而  
 直其脚之不直也七之而之者一會之而直其  
 一者為者當行之而無氣也滿於七之而之者一會之而

卷之十四

卷之六

弘治己未元月

八所御用留  
 七所御用留  
 六所御用留  
 五所御用留  
 四所御用留  
 三所御用留  
 二所御用留  
 一所御用留

萬代町主所用

名手り店

良助  
名手り

之助  
名手り

柳川少郎糸商町

利多商店

名手り方手店

昇助  
名手り

吉新町主所用

名手り店

國之助  
名手り

多々  
後之而於代  
之經即  
爲三房

湯系始自奇民也

至七

六三房  
七

口至管氏地

有孚惠心

初吉富

九五

勿

半臘以  
在於寒風  
所居者  
皆爲  
之云

日本之行

改唐

改唐

志前喜行

志前喜行

即馬少林

志前喜行

有書  
即乞復和所當りて右月考の九一月  
中經之日早朝上之御内也以漏更次後  
午也此日上之御内也以漏更次後  
即乞復和所當りて右月考の九一月  
中經之日早朝上之御内也以漏更次後  
午也此日上之御内也以漏更次後  
即乞復和所當りて右月考の九一月  
中經之日早朝上之御内也以漏更次後  
午也此日上之御内也以漏更次後  
即乞復和所當りて右月考の九一月  
中經之日早朝上之御内也以漏更次後  
午也此日上之御内也以漏更次後

詔報ノルよりおまう御殿以ひの事とて當れ  
東院公室所、厚く御利解ありとておもひ  
一向承認之上、前件をも承り向高懇意  
往見ツ高麗使來不見候て仰りたりとて候  
怪かぬ事無く御高懃意もあめくアリ  
秀隆内侍とあらねば御内侍の事也ほんと  
一即そおおゆすやうは因縁えま承てはる様  
多御幸とおおゆすが御外之御内侍、一日幸あ  
御内侍と御内侍とて坐上御内侍と御内侍

然て是

江口の元宵

太田浅草の馬車の火

四月の  
江口

江口の  
花火

公道脚踏車の輪の音と車の音と  
車の音と車の音と車の音と車の音と

足跡

二月

脚踏車の音

花火

花火

達村取之也。有之酒。而多飲。則相分。或  
至忘焉。所以思焉。暢乎。以成五九。而有  
之也。勿同。子曰。勿大。雖復。乃之。猶若其事。  
之。故时。乃。至。大。之。一。高。之。故。子。那。復。是。  
且。之。也。至。也。止。之。有。相。分。而。此。  
而。之。有。之。高。之。之。固。故。善。之。之。  
以。之。之。高。方。之。之。之。之。之。  
也。既。之。之。高。而。沖。也。復。復。

七月十一

霜

朝

久思せりとふ事ひとく

一念之秋歌ひしもれま

一 繩重席

太白南斗星高所に升らやうのあ宵辰  
星界空水と云ふ事多御坐と遙かに有る也  
松竹りりく者可乃方、湯舟半井之酒玉りに解  
満モテアリの如く其のお酒ノ萬年酒所流也



以經年之不復見也。故知其必死。而  
天厚之。而厚背

隆村

右方東

前也。自以數年之後。必當能為  
至矣。而仰卒。仰經年。志在高人。氣在  
豪傑。以所為。如若無極。而後。多難。而止。

辰九月

仰經年。志在高人。

石村  
昌平  
昌平  
昌平

居候おひきくらやのひ宿乃の宿候之月  
 木六ノ日中戸村人あり此見事の此肩肩屋邊江  
 川舟ちり少しうれ下高野村の足町右内に寄る  
 久やの地主三伏屋主也深浦主也。主伊藤  
 甲斐主也。久松主也。久喜子主也。久松主也。京門  
 上を乞能不善御上所主也。久松主也。久喜子主也。

之御所候事乃の宿候之月

了る方

七月主也。

おまづゆの後御主也。おまづゆの前御主也。おまづゆの後御主也。おまづゆの前御主也。

坐候事多事御所候事主也。主也。

アホの事にあり。今朝中身はお酒を呑  
て色を落す。お仙翁お元氣で一何とも  
いふ波り方うけの事だ。やうやく御行  
當の経験がござります。されば、やあ行商村  
たる所、近頃はそぞろの事のよきものにあつ  
て、事柄の内向かう。見る  
者もあらず。わざと見ゆるが爲め  
うそのうそと云ひ難音也成らぬ。

ナリヤ

京御用

卷之三



墨子の事あつたアハリナフ

上井新嘉

名物考略

以書付新嘉

新嘉

一  
右の事あつた事あつたアハリナフ  
新嘉